

兵庫県立 人と自然の博物館
 Museum of Human and Natural History, Hyogo
 http://hitohaku.jp
 hitohaku news paper

学びっ!

人と自然の応援情報誌

ハーモニー 67号
21巻 ② 2-028A3

ひとほく新聞

2009/12/25号
平成21年
保存版

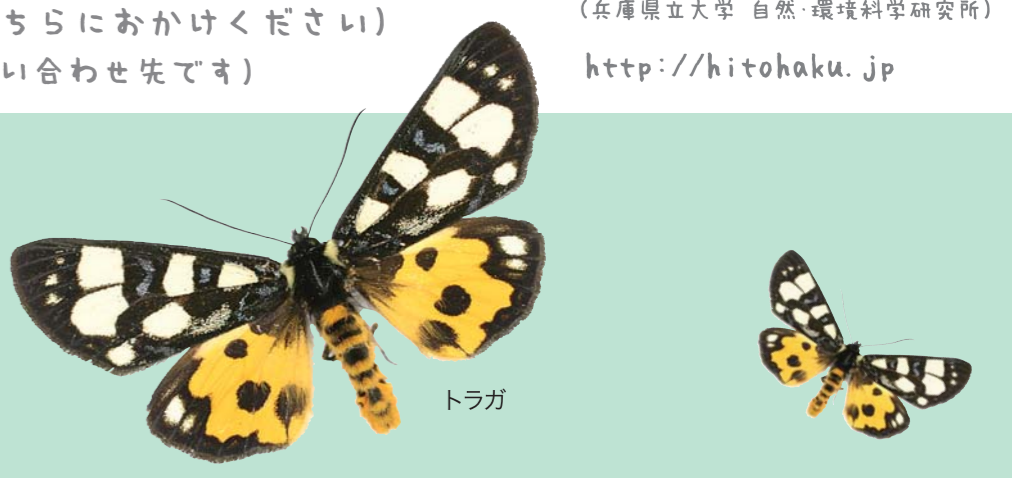
〒669-1546
兵庫県三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館
(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)

http://hitohaku.jp

TEL:079-559-2001 (ひとほくの代表番号です)
 TEL:079-559-2002 (学校や団体のご利用の方はこちらにおかけください)
 TEL:079-559-2003 (セミナーやイベントなどのお問い合わせ先です)



スマトラトラ(撮影 三谷雅純)



あれもこれもトラ!

2010年の干支「トラ」とはいったいどんな動物なのでしょう。トラはネコ科ヒョウ属に分類される大型の肉食動物で、学名は *Panthera tigris* と言います。ヒョウ属にはヒョウ、ライオン、ジャガー、ユキヒョウも含まれますが、縞模様がみられるのはトラだけです。トラはアジアだけに分布し、森林を主な生息場所としています。ただし、トラには複数の亜種があり、それぞれにシベリアトラ、ベンガルトラ、スマトラトラなどの名前がつけられています。亜種によって分布域や形態などは異なり、寒冷な地域に分布する亜種ほど体が大きくなる傾向があります。このような現象はベルクマンの法則と呼ばれ、ニホンジカもこの例の一つです。ちなみに、トラの最大亜種はシベリアトラで、そのオスは全長3m、体重300 kgに達します。

例えば、オカトラノオやヌマトラノオでは、長く伸びた花序がトラのシッポ(虎の尾)に似ていることが名前の由来です。一方、名前に模様に関係している場合でも、オニユリの花の模様のように、これがトラ模様?(私にはヒョウ柄に見えます)という例もあります。このような例は他にも存在すると思います。生き物の名前の由来を調べたり考えたりすることは、自然を楽しむ一つの方法です。ぜひ「トラ」イシてみてください。

石田弘明(自然・環境再生研究部)



オカトラノオ



トラフズク



オニユリ



トラフトンポ

トラの亜種数はわずかですが、トラ以外の動物や植物の中にはトラ(虎・Tiger)と名のつくものが意外とたくさんあります。例を挙げると、鳥類ではトラフズク、トラツグミ、両生類ではトラフガエル、魚類ではトラフグ、トラザメ、トラウツボ、トラギス、昆虫類ではトラカミキリ類、トラガ、トラフシジミ、トラマルハナバチ、トラフトンポ、トラフコメツキ、トライクビチョッキリ、ハンミョウ(Tiger beetle)、顕花植物ではオカトラノオ、ヌマトラノオ、ハルトトラノオ、トキワトラノオ、ムカゴトラノオ、ヤマルリトラノオ、ミズトラノオ、ヤナギトラノオ、トラノオジノ、イタドリ(虎杖)、オニユリ(Tiger lily)、トラノハナヒゲ、トラフスキ、シダ植物ではトラノオシダ、ルリトラノオ、コケ植物ではトラノオゴケ、海藻ではウミトラノオなどがあります。では、なぜトラなのでしょう。「トラの模様に似ているから」がその理由として最初に思い浮かびますが、実は名前の由来は様々で、トラ模様だけが唯一の決め手ではありません。

『名所図会』にみる雪の日

江戸時代後期にはじまった『名所図会』は、挿絵を多く用いて各地の名所旧跡を庶民に紹介する書物です。今で言う、観光ガイドブックのようなものでしょうか。今回は、『摂津名所図会』^(※1)に掲載されている絵図の中から、雪の日を描いた絵図をご紹介します。

上の絵図は、『摂津名所図会』に描かれた雪の日の「浮瀬」です。「浮瀬」は、現在の大阪市天王寺区伝人町にあった有名な茶屋で、この絵によると、その庭には古老の松の大樹が植えられていました。座敷からは、瀬戸内海を往き交う船舶の白帆や淡路島の山に落ちかかる三日月などが眺望できました。図の右中央部の棟の二階の座敷では、客人たちが芸妓とともに、名物の杯「浮瀬」を鑑賞しています。この杯に酒を盛れば七合半(1350cc)で、それを飲みほした人は、名誉として「暢酣帳」^(※2)という名簿に名前を載せました。茶屋の名称は、この杯に因んでいます。

下の図は、同じく「浮瀬」を描いた浮世絵版画で、『浪花百景』^(※3)に収められています。当時の人たちが、雪見酒を楽しんでいたことが想像できます。寒い雪の日をぜひたくに楽しむ遊びが、江戸時代の大阪に見られたのでした。上の絵図は、ぜひお好きな色を塗って、お楽しみください。

上田萌子 (自然・環境マネジメント研究部)



図：上「浮瀬」(摂津名所図会第二巻より) 図：下「増井浮瀬夜の雪」(浪花百景より)
 ※1：1796年～1798年にかけて刊行された摂津国(現在の大阪府北部から兵庫県南東部にかけての地域)の地誌・案内書。秋里籬島著。
 ※2：江戸時代末期(1854～1859)の大坂の代表的な名所100景を描いた浮世絵版画。大坂の浮世絵師・歌川国員らの合作による。
 参考引用文献：宗政五十緒編『上方風俗 大阪の名所図会を読む』(株)東京堂出版、p128-p129

ひとほくコラム

冬晴れの記憶

江崎保男
(兵庫県立人と自然の博物館 次長)

〈厳冬〉という言葉は遠いものになってしまいましたが、私が子どもの頃昭和30年代の冬は、大阪の街中でも本当に寒かったものです。毎朝、小さなカーリングストーンのような、ドラム缶上の凹部にたまった氷塊を運動靴で蹴りながら、学校に通ったものでした。自宅の庭では母が〈落ち葉焚き〉です。そこには、湿らせた新聞紙にくるんだサツマイモが入っており、帰宅後のおやつになりました。

正月は独楽と凧揚げに明け暮れていました。駄菓子屋で買い求めたひとつ10円の凧に、新聞紙を切って凧の両面に長く糊ではりつけ、バランスをとります。風の弱い日は空にあげるまえに少々走らねばならないのですが、風が強いと兄や姉に凧をもってもらい5mくらい離れた所から凧糸を操作するだけで、十分にあげてしまいました。空高くあがると「子どものことですから、何mあがったものやら本当はわからないのですが、きっと20m以上だったと想像します。そこで他の凧と合戦になることもありました。

そのとき凧の背景にみえた冬空こそ〈冬晴れの空〉なのだ、その深い色を寒かった肌の記憶とともに、懐かしく思い出すのです。